

2021年7月27日

学修歴・成果の可視化と教学責務——

DX時代におけるIRの本質的な存在意義と機能強化の方向性

～ IRが、大学教育や大学文化の破壊者とならないために、

いま本当に考えなければならないこと～

【8月5日（木）開催】

ご参画・ご派遣のお願い

酷暑お見舞い申し上げます。8月5日（木）開催の「DX時代におけるIRの本質的な存在意義と機能強化の方向性」セミナー講師の福島 真司氏よりパンチのある熱いメッセージをいただきました。

是非ともご高読いただきたいと存じます。

「IRが成果を上げている」、これは、どのような状態をさすのでしょうか。高等教育の学会や、IRの講演、「教育の質保証」「学修成果の可視化」等のセミナーに参加すれば、多くの事例が語られますが、例えば、「特別な分析手法からこれまでわからなかった学生の傾向が導き出された」「IRデータをもとにPDCAをサイクルさせ認証評価をクリア出来た」「IRデータを分析し教育改善につなげた結果、学生が一層成長した」等は、IRの成果と言えるのでしょうか。

仮に、これらの例えが、「学会で一定の評価が得られる分析手法を提案できた」「自己点検・評価報告書に、PDCAに寄与している風にIRデータを添えることができた」「学生が成長しているという結論が導けるように、うまくIRデータを整えることができた」と言い換えが可能だとすれば、それは一体、誰にとっての、何のための「IRの成果」なのでしょうか。

大学マネジメントにおいて、IRは徐々に重要度が増している状況にありますが、それには、「EBPM（エビデンス・ベースド・ポリシー・メイキング）」等の社会の潮流も理由として挙げられるでしょう。今後、高等教育の現場には、「DX」や「データ駆動型XX」が急速に浸透することが予想されます。これらは、文字通りデータを重視する取り組みであり、IRとの親和性が高いことから、IRへの期待はますます高まる可能性もあります。

この状況にある今だからこそ、立ち止まって整理しなければならないIRの重要な課題が山積していることを、大学マネジメントの携わる者は知る必要があります。

まず、何が「エビデンス」と言えるのでしょうか。「ある学生に、特定の働きかけをした結果、成長した」、この証明には、成長の定義を定め、働きかけがなければそうな

らない証明も必要ですが、そのようなデータは日本にあるでしょうか。

自学の外部評価や PR に活かされることが「IR の成果」であれば、他大学含め一般には再現できない分析ですので、都合のよく数値を作ることが可能です。

AI 等の新技術に関しても、例えば、バイアス等の大きな問題があります。一定のデータ量があれば答えは出ますが、データの有無自体にもバイアスは影響しています。バイアスを除くことなしには、AI は、一般的な差別や偏見をそのまま結果として出しますが、それをもとに教育を駆動させることには倫理上大きな問題があります。

しかしながら、IR での活用ルールや倫理憲章等がないままでは、バイアスの除去は、IR 担当者に委ねられます。もし、IR 担当者が気付かないバイアスがあった場合、分析結果はどうなるのでしょうか。

DX の成否を分けるのは、「データの民主化」と「データガバナンス」であるという主張があります。「教育 DX」の導入には、これまでの「大学ガバナンス」では対応が出来ず、新たな状況に対応したガバナンスが必須であり、それなくしては、大学教育は、大きな混乱を迎えることになるでしょう。

本セミナーでは、10 年後「IR は大学教育の破壊者でしかなかった」とならないために、今だからこそ取り上げるべき重要なテーマを議論いたします。IR 担当者だけを対象とするものではなく、「教育の質保証」「大学ガバナンス」を含む「大学マネジメント」にご関心ある、多くの皆様のご参加を歓迎いたします。

本セミナーの参加方式は、「当日会場参加」・「当日オンライン参加」・「メディア参加」の 3 形式をご用意しております。開催が間近となり、たいへん性急な次第ですが、理事・教員・職員各位のご参画、派遣につき、何卒、ご高配のほど、お願い申し上げます。

パンフレット版（PDF ファイル）は下記をご高覧願います。

<http://chiikikagaku-k.co.jp/kkj/seminar/210805.pdf>